研究ノート

太宰府の屋瓦

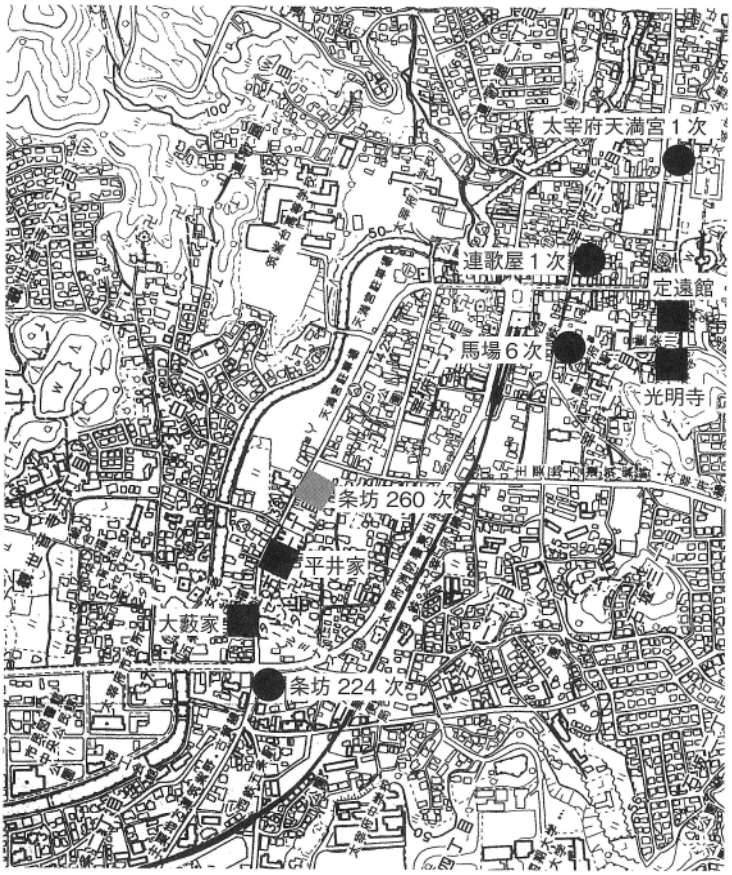
――梅の文様のある瓦――

山村　信榮

はじめに

江戸時代の太宰府は「西府」「宰府」などと呼ばれ、天満宮の門前町を中心に小都市の観を呈していた。まちには天満宮に奉仕する社家といわれた僧侶や神官の屋敷や門前の旅宿、代官屋敷、商人や職人の家屋敷が立ち並んでいた。江戸時代後期の「博多太宰府図屏風」や天満宮境内図などには、天満宮を中心に切れ目のない家並みが五条のあたりまでびっしりと描かれている。建物の屋根は茅葺きに表現されるものが多いようだが、瓦を用いたものも描かれている。

太宰府天満宮周辺から五条地区の発掘調査では古代・中世の遺物と共に江戸時代の遺物が相当量出土している。中でも瓦は物量的に多い遺物であるが、特徴的なのは天満宮の神紋である「梅鉢文（うめばちもん）」と呼ばれる梅の花をデザインした文様の瓦が存在することである。この瓦は福岡地域でも太宰府天満宮を中心とする旧門前町付近からしか出土しない特殊な瓦で、天満宮境内、連歌屋、馬場、五条の現場で出土している。神社だけでなく一般の民家の屋瓦としても使われていたことがわかる（第１図）。



第１図　梅鉢文瓦出土地点（●）と平井家と外壁の瓦（■）

一　梅鉢文瓦の特徴と変遷

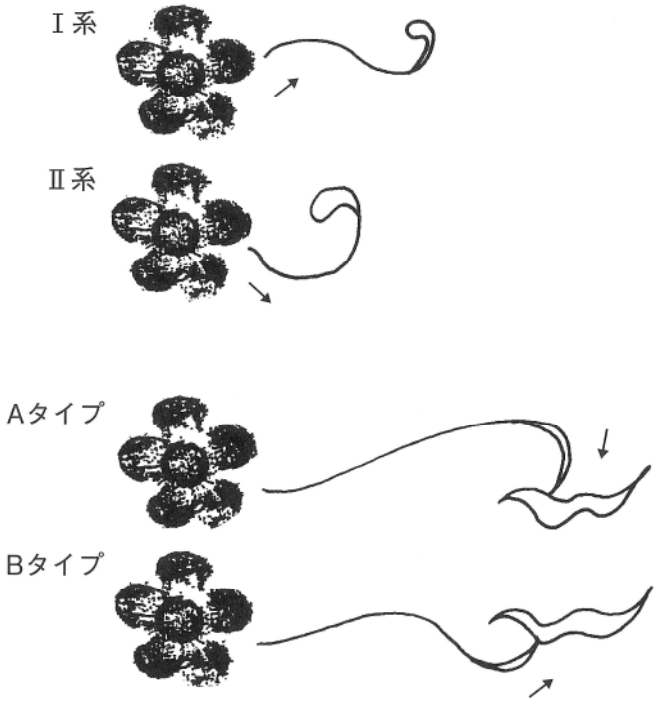
出土した梅鉢文の軒丸、軒平瓦はその文様を詳細に観察すると幾種類かの別の笵型によって制作されたこと、その出現が十八世紀後半で明治に入って以降も消費されていたことがわかりつつある。

出土した丸瓦は、五弁の梅花の周りに幅のある円が囲む意匠であり、平瓦は中心に五弁の梅花があり左右に唐草が広がる意匠を持っている。唐草は上中下段の三段から構成される展開のものが多い。梅鉢紋の瓦の分布は天満宮境内、馬場、連歌屋遺跡など天満宮周辺に限られるといっても良い状況で出土しており、境内および門前町での使用に特化して生産された特殊な瓦である。

現在のところその始源の時期は馬場遺跡六次調査ＳＸ〇四六の十八世紀後半頃に置かれ、幕末から明治期には当地においては通有の文様として、軒の丸平問わず採用されている。

軒丸瓦は今のところ大小二種類のものがあり、五弁の花弁の形状は撥形（Ⅰ系）、楕円形（Ⅱ系）の二種があり、撥形のものには素弁（Ａタイプ）のものと中心に短い棒線状の子葉のあるもの（Ｂタイプ）の二種がある（第３、４図）。

軒平の梅鉢紋には唐草の展開で大きく二系統二タイプの区分が可能で、系統は上段の唐草が上から下に向かうもの（Ⅰ系）と下から上にカールするもの（Ⅱ系）に分けられる。さらに中段二本目の唐草は二手先になるが、その一手目の先が上から下に下がるもの（Ａタイプ）と下から上に上がるもの（Ｂタイプ）に分けられる（第２図）。今のところＡタイプのものは馬場六次調査ＳＸ〇四六にあるため十八世紀後半には存在し、Ｂタイプのものは連歌屋一次ＳＫ〇〇七のものが古く十九世紀中頃以降には確実にあるといえる（第３図）。



第２図　梅鉢文平瓦分類　概念図

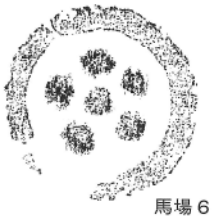
二　現存する天満宮周辺の梅鉢文瓦

この梅鉢文を持つ瓦が、現在でも五条から天満宮までの間の建物や外壁に見ることができる（第５図）。五条一丁目の大藪善治邸築地壁、五条一丁目旧中村酒屋（条坊二六〇次調査地点）築地壁、宰府四丁目の太宰府天満宮北の通用門、宰府二丁目旧定遠館築地壁、光明寺築地壁、石坂四丁目太郎左近社などが挙げられる。

軒平瓦について文様を概観したい。五条一丁目旧中村酒屋（条坊

18世紀後半

馬場６次 SX046



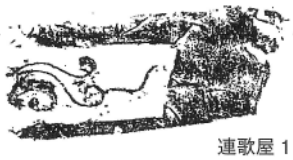
馬場６次 SX090

馬場６次 SX046

0　10cm

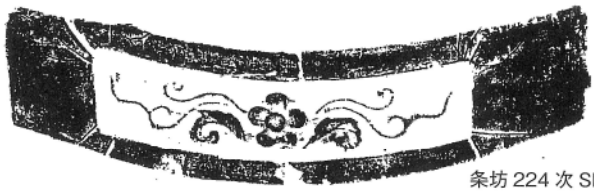
19世紀中頃

連歌屋１次 SK007

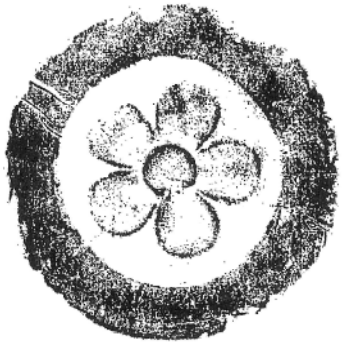


連歌屋１次 SK007

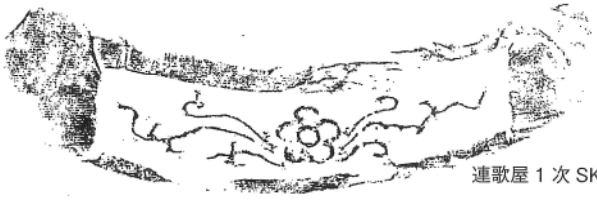
19世紀後半以降



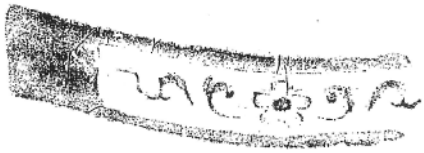
条坊 224 次 SK101



馬場６次灰茶砂

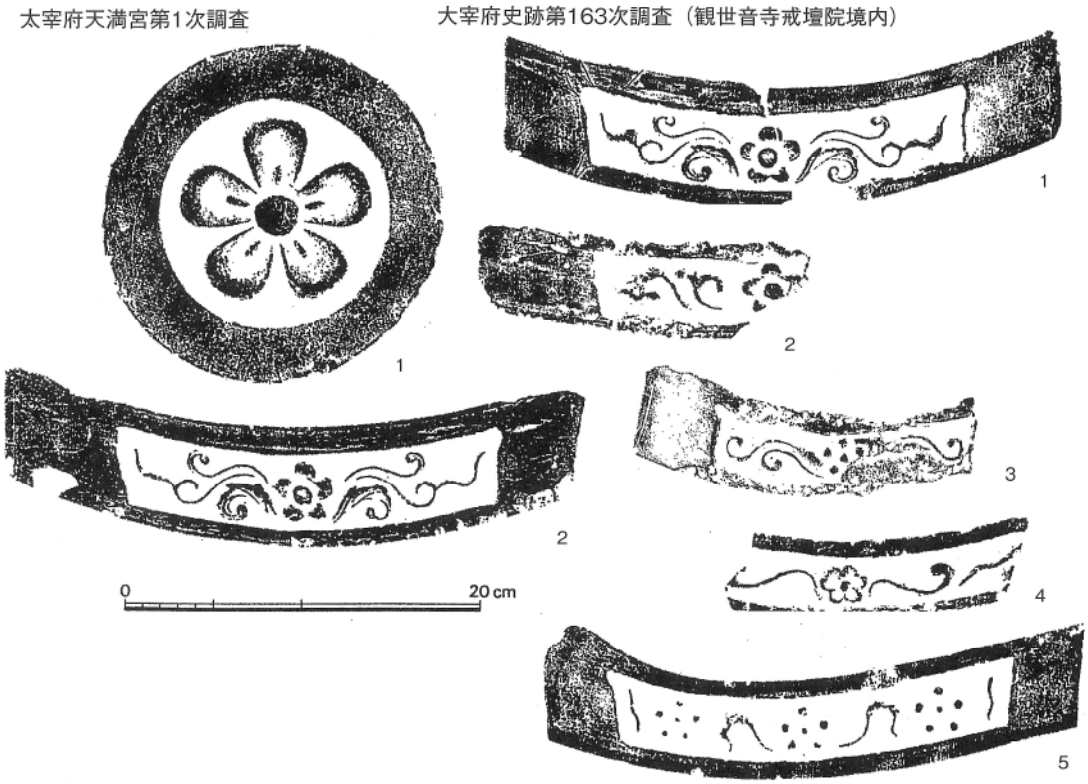


連歌屋１次 SK007



馬場６次黒褐色土

第３図　太宰府出土梅鉢文瓦編年図



第４図　太宰府出土時期不明の梅鉢文瓦

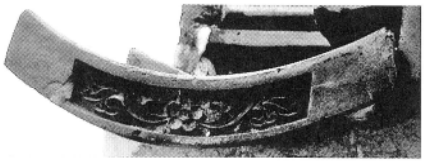
二六〇次調査地点）の築地壁は残念ながら一昨年に取り壊されたが、その際に二種の梅鉢文軒平瓦が回収されている。１タイプは出土瓦のⅡＡ型に属すもので、文様の縁が線彫りになる特徴を持つ。２のタイプは出土瓦Ⅱ系のもので、中心飾りの梅の花弁が円で表現されている。

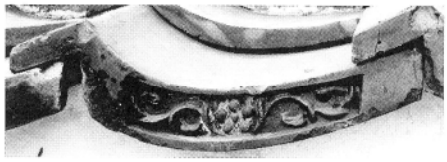
宰府二丁目の光明寺築地壁は９タイプが確認されている。１は出土瓦ⅡＡ型、２はⅡＢ型に属し、３と４は線彫りのⅡＡ型に属すもので３は中心飾りが小さい。４は左下に垂下した唐草の葉先が丸い形を呈している。６は４タイプの幅が狭いもので、７は文様が線ではなく肉彫りで表現されるものである。５は線彫りで中心飾りが小さく、唐草でなく草葉文様である。８と９は６のタイプがさらに幅が狭くなったもので、９は平成になって新造されたものである。

五条一丁目の大藪家のものは三種があり、１タイプは出土瓦のⅡＡ型に属すもので、文様の縁が線彫りになる特徴を持つもので、条坊二六〇次調査地点の１と同笵の可能性がある。２タイプは出土瓦のⅡ型に属すもので、文様の縁が線彫りになる特徴を持つ。１とは唐草外側の展開がシンプルで、中心の梅の花弁の個々が独立している違いがある。３タイプはＡ系統ではあるが、唐草の上段と下段の意匠が他のものと逆で写実的な表現を採っている。４タイプは１タイプ同様のⅡＡ型に属す類似した意匠だが、左の唐草下段の下の葉先は右側が鋭角に表現される別笵のものである。

宰府二丁目旧定遠館のものは七種がある。１タイプは出土瓦のあえて当てはめるのであればⅡ型に属すものであるが、文様の展開は模式的で稜線を持たない。中心の梅鉢文は円で表現される。２タイプは文様の縁が線彫りのⅡＡ型に属すもので、大藪家４タイプに類似する。３タイプはⅡ型に属すもので、文様の縁が線彫りになる特徴を持ち大

条坊 260 次


1


2

光明寺

1

2

3

4

5

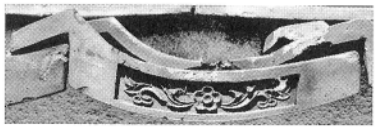
6

7

8

9

五条大藪家


1

2

3

4

天満宮定遠館

1

2

3

4

5

6

7

第５図　太宰府天満宮周辺に現存する梅鉢文瓦

藪家2タイプの同笵と思われる。4タイプは線彫りで中心飾りが小さく草葉文様で構成される。光明寺5タイプと同笵と思われる。5タイプはⅡB型に属し、光明寺2タイプに類似する。6タイプはⅡA型に属し、唐草の蔓は単調な線で表現されている。7タイプはA系統の唐草の上段と下段の意匠が他のものと逆のもので、中心飾りが潰れているが大藪家3タイプと同笵と思われる。

現在使用されている梅鉢紋様は先に分類した江戸期の出土遺物と比較すると、同笵のものは存在せず、文様の系統は江戸期のものを踏襲しながらも意匠に変容が認められ、後時的な様相を持つものとして捉えられる。

三　梅鉢文瓦の生産者

平成十八年度の聞き取り調査でこの瓦の一部が五条平井家で生産されていたことがわかった。平井家は昭和三十年代まで瓦を生産していた家で、平井勝也氏宅では現在でも嘉永三（一八五〇）年の墨書がある軒平瓦の木型が制作道具とともに大切に保存されている。これら天満宮周辺の梅鉢紋瓦の生産に宰府六座の平井家が関わっていたことが知られる。太宰府市では平成十九年五月十七日に資料調査をおこない、そこで軒平瓦五点、軒丸瓦六点の瓦笵型（平瓦は雌型、丸瓦は雄型）を確認することができた（第6図）。

平瓦はすべて木笵であった。1はⅡA型に属し文様の縁に線彫りを施す（笵では突線）もので、中心飾りの梅鉢文は上下に余白を持つ小さな意匠である。この笵には裏面に墨書が観察され、嘉永三（一八五〇）年の銘が見られる。いつの時点で注記されたものかは不明であるが、意匠の変遷を考える上で一つの座標を与える資料である。2と3は文様の縁に線の表現があるものの肉彫りの唐草で表現されるもので、ⅡA型に属す。3は2よりも幅が狭く丈高で中心飾りの上に余白がある。4は梅鉢文が円で表現され、唐草は縁に線のある肉彫りのものである。5は他の笵より一回り小型で、梅鉢文は小さく中心と両方の上外側に珠文が施されている。葉は唐草風でなく草葉文で表現される。

丸瓦は全て雄型で、瓦笵を土で制作するための原型と思われる。1が木製の他は、2と6が土師質焼成、他は瓦質焼成の土製品である。出土瓦分類の撥形素弁のIA型に属すが、5は子葉のあるBタイプである。3には裏面に焼成前にヘラ描きの文字があり「豊前田川能方村瓦師永蔵」と見える。4には同様に「太宰府神社々務所七ノ材巴形」と書かれている。明治期のものか。

これらの中に現存する太宰府天満宮周辺の梅鉢文瓦と同笵ないし近似するものが含まれている。平瓦笵2は条坊二六〇次1タイプ、大藪家1タイプに近似し、光明寺5タイプと定遠館4タイプは平瓦笵5が元型と思われる。丸瓦5は太宰府天満宮一次出土の丸瓦と同じものであろう。

太宰府天満宮周辺に現存する梅鉢文瓦は、一カ所に複数の意匠のものが使用される共通性を持っており、建設以来修復を重ねてきた結果が反映されているものと推測される。この中にお互いに共通する意匠の瓦が使用されていることから、民家や天満宮を含めた地域一帯で通有の瓦の供給体制があったものと考えられる。その供給元の多くは五条平井家であり、江戸後期以降近代（一部現代か）に至るまでその状況が続いていたものと想像される。現代には光明寺に見られるように

軒平瓦

1

（「嘉永三年」銘墨書）１裏

2

3

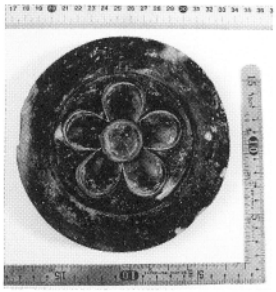
4

5

軒丸瓦

1

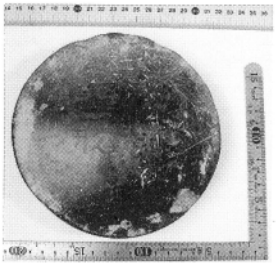
2



3

３裏

4

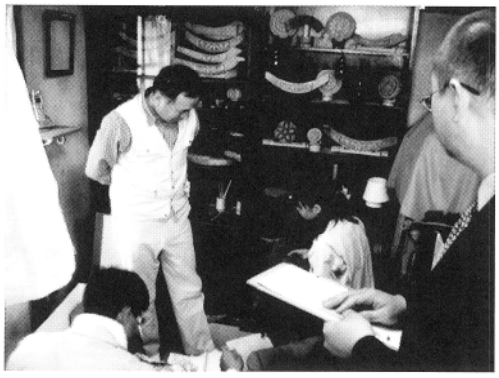


４裏

5

５裏

6



2007 年５月 17 日調査状況

第６図　五条平井家所蔵の梅鉢文瓦笵型

梅鉢文瓦に「今宿三衛門」印の瓦が用いられることから、文様意匠は継承しつつ他の産地（福岡市西区今宿等）からの製品に置き換わって今に至っている様相が見られた。瓦笵の製作も明治期には直方の瓦師の援助を受けていたらしいことも分かった。

四　都市のデザイン

江戸時代には日本各地で城下町を中心に都市化が進み、たびたび大火が起こるようになり、このため都市部では城や寺社以外の建物でも防火のために瓦を使用するように奨励された。江戸時代から近代の太宰府のまちで独自の意匠の瓦がまち並みを飾っていたことは、大都市であった福岡や博多にもなかったことで特筆されることである。その需要をまかなっていた瓦生産が他地域に依拠していなかったことは、宰府が近世的な都市性を備えていたことを示している。

参考文献

『太宰府天満宮』（太宰府天満宮一次調査）（太宰府天満宮境内地発掘調査報告書第一集）一九八八年　太宰府天満宮
『連歌屋遺跡1』（連歌屋一次調査）二〇〇三年　太宰府市教育委員会
『馬場遺跡3』（馬場六次調査）二〇〇八年　太宰府市教育委員会
『大宰府史跡』（平成七年度概報）（大宰府史跡一六三次調査）一九九六年　九州歴史資料館

（やまむら・のぶひで　太宰府市教育委員会文化財課技師）

太宰府市史　全13巻（14冊）編集委員長　川添　昭二

考古資料編　高倉洋彰・石松好雄編　平成4年4月刊行
民俗資料編　佐々木哲哉・森弘子編　平成5年4月刊行
建築・美術工芸資料編　澤村仁・八尋和泉編　平成10年5月刊行
古代資料編　長　洋一編　平成15年11月刊行
中世資料編　佐伯弘次編　平成14年10月刊行
近世資料編　中村質・梶原良則編　平成8年3月刊行
近現代資料編　有馬　学編　平成11年1月刊行
文芸資料編　赤塚睦男・山内勇哲編　平成14年9月刊行
環境資料編　小林茂・磯望・下山正一編　平成13年9月刊行
通史編Ⅰ　高倉洋彰・石松好雄・磯望・小林茂・長洋一編　平成17年3月刊行
通史編Ⅱ　佐伯弘次・梶原良則編　平成16年12月刊行
通史編Ⅲ　有馬　学編　平成16年9月刊行
「古都太宰府」の展開―通史編別編―　有馬学・日比野利信編　平成16年3月刊行
年表編　佐々木哲哉・森弘子編　平成16年3月刊行

※頒価　各五、〇〇〇円（消費税込・送料別）

問い合わせ・申込先　太宰府市市史資料室
〒八一八―〇一三一　太宰府市国分四丁目九―一　文化ふれあい館内
電話　〇九二―九二一―二三二一（直通・ファックス兼用）
ホームページ　http://dazaifu.mma.co.jp